

明治三十五年十一月出版

小學徒遊戲唱歌全

福田書房





4  
y  
9





● 小學生遊戯唱歌目次

● 第一、花 <small>はな</small> 咲 <small>さき</small> 爺 <small>ぢい</small>	● 第九、箱 <small>はこ</small> 庭 <small>はば</small>	● 第十七、小 <small>こ</small> 春 <small>はる</small>
● 第二、桃 <small>もも</small> 太 <small>た</small> 郎 <small>ら</small>	● 第十、さるかに	● 第十八、ひばり
● 第三、犬 <small>いぬ</small> ころ	● 第十一、池 <small>いけ</small> の 鯉 <small>こい</small>	● 第十九、駒 <small>こま</small> の 蹄 <small>ひづめ</small>
● 第四、とんぼ	● 第十二、大寒 <small>おほさむい</small> 小寒 <small>こさむい</small>	● 第二十、散步 <small>さんぽ</small> 唱歌 <small>しやうか</small>
● 第五、金 <small>きん</small> 太 <small>た</small> 郎 <small>ら</small>	● 第十三、一羽 <small>いっは</small> の 蝶 <small>てふ</small>	● 第二十一、金 <small>きん</small> 魚 <small>ぎよ</small>
● 第六、舌 <small>した</small> 切 <small>きり</small> 雀 <small>すずめ</small>	● 第十四、金言 <small>きんげん</small> 唱歌 <small>しやうか</small>	● 第二十二、菊 <small>きく</small>
● 第七、浦島 <small>うらしまたろ</small> 太 <small>た</small> 郎 <small>ら</small>	● 第十五、虎穴 <small>こけつ</small> に 入 <small>い</small> ば	● 第二十三、小 <small>ちい</small> さ さ 砂 <small>すな</small>
● 第八、黒髪 <small>くろかみ</small> 櫛 <small>けつ</small> る	● 第十六、菅 <small>かん</small> 公 <small>こう</small>	目次おはり

◎ 花 咲 爺

一、うらの は た け で は ち が な く、  
 正 直しやうぢき ち い さ ん は っ た れ ば、  
 お は ば ん こ ば ん が、  
 ざーくくくくく。  
 二、い ち わ る ち い さ ん は ち か り て、  
 う ら の は た け を は っ た れ ば、  
 か は ら や せ と か け、



ガーらくくく。

三、正直しやうぢきぢいさんうすほって、

それでもちをついたれば、

またごろこばんが、

ざーくくく。

四、いぢわるぢいさんうすかりて、

それでもちをついたれば、

またごろせとかけ、

ガーらくくく。

五、正直しやうぢきぢいさんはひまけば、

はなはさいたかれおたに、

はーびはたくさん、

おくらにいっばい。

六、いぢわるぢいさんはひまけば、

このーさまのめにとまり、

ごうくろーやに、



つなぐれました。

◎桃太郎

一、桃からうまれし桃太郎

氣はやさしくてちからもち、

おにが島をばうたんとて、

いさんで家を出かけたり。

二、日本一のきびたんど

なまけにつまくる犬と猿

雉子ももらうておともする、

いそげものどもおくるなよ。

三、はげしいいくさに大勝利

鬼が島をばせめふせて、

取った寶はなにくづ、

金銀さんごあやにしき。

四、車につんたたからもの、

犬がひきたすゑんやらや、



さるがあとおすゑんやらや、  
雉子きじがつなひくゑんやらや。

◎犬いぬころ

一、坊ぼくやおうちにはちがゐる、  
ふつくりふとつたはつちり眼まなこ、  
見るさへかわゆきなほ其上そのうへに、  
わんくくくとドやれてくる。

二、坊ぼくやおうちのはいりに、

いつでも尾しっぽをちよとふり立たつて、

嬉しい様子ようすでおともとなつて、  
わんくくくとついてくる。

三、坊ぼくやおうちの門かどに居ゐて、

あやしい者ものが來きたその時ときは、  
おこつてたけつて聲こゑふり上あげて、  
わんくくくとはへたてる。

◎とんぼ



とんぼよとんぼ鹽辛とんぼ、  
とんでとほく行くな、  
もとのとこにとまれ、

日向はあついで日かけで休め。

◎金太郎

一、まさかりかついで金太郎、  
熊にまたがりお馬のけらこ、  
ハイシドローくハイドローく、

ハイシドローくハイドローく。

二、あしがら山のやまおくで、

けたもの集めて相撲の稽古、

ハッケヨイヨイノコッタ、

ハッケヨイヨイノコッタ。

◎舌切雀

一、のりをなめたるむくゐとて、

舌を切られし雀をば、



いとしいといふて慈悲ふかき、  
ぢいぢが尋ねて出かけたなり。

二、舌切雀やどはどこ、

たづねあてたる竹の門、

むかへに出たる雀の子、

親もよろこびちそーする。

三、さゝのきげんもおもしろく、

雀をどりもおもしろく、

土産のつづらからけれど、

寶ぞおほく出たりける。

四、夫をうらやみ慾ふかき、

ばああが尋ねてちそーうけ、

もらへしつづらおもけれど、

虫こそおほく出たりけり。

◎浦島太郎



一、むかしくうらしまは、  
 子供のなぶる龜を見て、  
 あわれと思ひ買ひとりて、  
 深きふちへとはなちける。  
 二、或日おほきな龜が來て、  
 むーしく浦島さん、  
 龍宮といふよいところ、  
 そこへ案内致しませう。

三、浦島太郎は龜に乗り、  
 波の上やら海のそこ、  
 鯛しびひらめ松魚さは、  
 むらがる中を分けて行く。  
 四、見ればおどろくからもんや、  
 さんごの柱しやこの屋根、  
 しゆんどめやるりでかざりたて、  
 夜もかがやくおくとでん。



五、おとひめさまのお氣に入り、

浦島太郎は三年を、

龍宮城でくらすうち、

我が家こひしくなりにけり。

六、歸りて見れば家もなし、

これはふしぎと玉手箱

開けば白さけむがたち、

白髪の爺となりにけり。

◎黒髪櫛る

黒髪けづる朝あらし、

葉末をあらふ夜半の雨、

おきてもいねても君のため、

あわれ我ますらをば、

命をすつるかごと、

かはねをさらすかごと。

◎箱には



一、來て見よ君も吾が箱庭を、

金魚のひれに波立つ海を。

二、はかけてうけしつけぎの船を、

むかひの岸に吹けく風よ。

◎さるかに

一、早く芽をたせ柿の種、

出さぬと鉄でチヨンぎるぞ、

はやくならぬか柿の實よ、

ならぬと鉄でチヨンぎるぞ。

二、蜂や卵やたちうすが、

かにをたすけてかたまうち、

卵のぢらいか蜂のやり、

とうくさるめがつぶされた。

◎池の鯉

一、うかび出て遊べよ、

池の鯉緋鯉よ。



三、たゞく手をしるべに、

あつまりて鰭ふれ。

三、睦ましくむれて、

投げてやる麩を食へ。

四、鯉よその緋とひよ、

親も子も出てこよ。

◎大寒小寒

一、おほさむことさむ冬の風

あれく鳥が四つ五つ、

かーくくとないて行く、

あれは時に歸るのか。

三、大寒小寒冬の風

あれく木の葉が六つ七つ、

ひらくくともうて行く、

あれはどこまでとんでゆく。

◎一羽の蝶



一、一つの蝶は菜の花とめて、

ひらく遊べあそべく、

遊びあかは静かにねむれ。

二、一つの蝶は菜の花のへに、

静かに眠れねむれく、

眠りさめばひらく遊べ。

◎金言唱歌

一、玉みがかねば光なし、

人學ばねば智なしとか、

まなびの山は高けれど、

登ればたのし花の山。

三、春はたねまき秋は刈る、

まかすば種も生へざらん、

おさなき時は人の春、

遊びて秋を待つなかれ。

◎虎穴に入らば



一、虎穴に入らば虎の子を、  
 手取る事さへおたからず、  
 萬死に入らば敵兵を、  
 破る事さへいとやすし。  
 二、日本武夫のたましいの、  
 こもれる劍拔きつれて、  
 彈丸雨飛のその中を、  
 勇みくくして進み行く。

◎菅公  
 學者の家に身はいで、  
 たちまち登る雲の上、  
 よし災にたふるとも、  
 いかでか君を忘るべき。  
 ◎小春  
 見よとて咲くのは千草、  
 櫻はかへりて咲くよ、



二、軒端のきばに友ともよぶすゞめ、  
たのしく小春こはる。

梢こすねにさへずるもづよ、

たのしく小春こはる。

三、取ととて赤あかきは柿かきよ、

ひろへと落おつるは栗くりよ、

たのしく小春こはる。

四、日蔭ひかげに初霜はつしもさへて、

赤あかくあかきは紅葉もみぢ、

たのしく小春こはる。

五、ゆたかにたれたる稻穂いなほ、

眺ながむる農夫のうとの笑顔えがほ、

たのしく小春こはる。

◎ひばり

雲雀ひばりはあがる天てんまでよ、

櫻さくらはちるよ春風はるかぜに、



てふくは舞ふよ菜の花に、  
吾等はあるそふ春の野に。

◎駒の蹄

一、行けくたんと日本男兒

學びのおくかは何處が限り、

奮發勉勵必得成功、

駒の蹄のむかふがまゝに。

二、行けくたんと日本男兒

義勇のすみかは何處が極み、

東西南北報國盡忠、

駒の蹄のいたるがまゝに。

三、行けくたんと日本男兒

墳墓の土地を何處といはん、

六大洲中縦横無盡、

駒の蹄のとがまる所。

◎散步唱歌



一、涼しき流れ清き風

夏こそ野邊に來りたれ、

散歩の時は今なるぞ、

過すなあたに休み日を。

二、日は暑からず寒からず、

くもらぬ空もたのみあり、

若葉の中に咲きのころ、

つゝトたづねん諸共に。

◎金魚

一、お池の中に仲よくあそぶ、

金魚や金魚こいこいこゝへ、

皆來へこゝへそれ麩をあけよ。

二、あれく御覽かわゆい金魚

小さへ口でつゝつさまわし、

あのふをたべるも一つあけよ。

三、浮いては麩を食べ沈んで遊ぶ、



まるこに三尾鮒をも一所に  
伸よく遊ぶお池の金魚。

◎菊

一、な、草千草のおはかる秋に、  
一と際目立て匂ふは菊よ。

二、紅葉は散りすぎ霜さへおくに、  
園生の垣根を守るは菊よ。

三、菊よりもす花なしとやいはん。

賢き御門の御旗のしるし。

◎小さき砂

一、小さき砂の一こつぶも、

積れば富士の山となる、  
我等もたゆまず勉めなば、

終には登らんあの山にあの峯に。  
三、ちいさき水のしたよりも、

積れば末は川となる、



我等も日ごとに進みつゝ、  
 大きく育たぬ富士川のその如く。  
 三、細谷川をゆく水も、  
 出でゝは廣き海となる、  
 我等が望みも學問も、  
 終にたゞへん駿河なるあの海と。

小學徒 遊戯唱歌 おはり

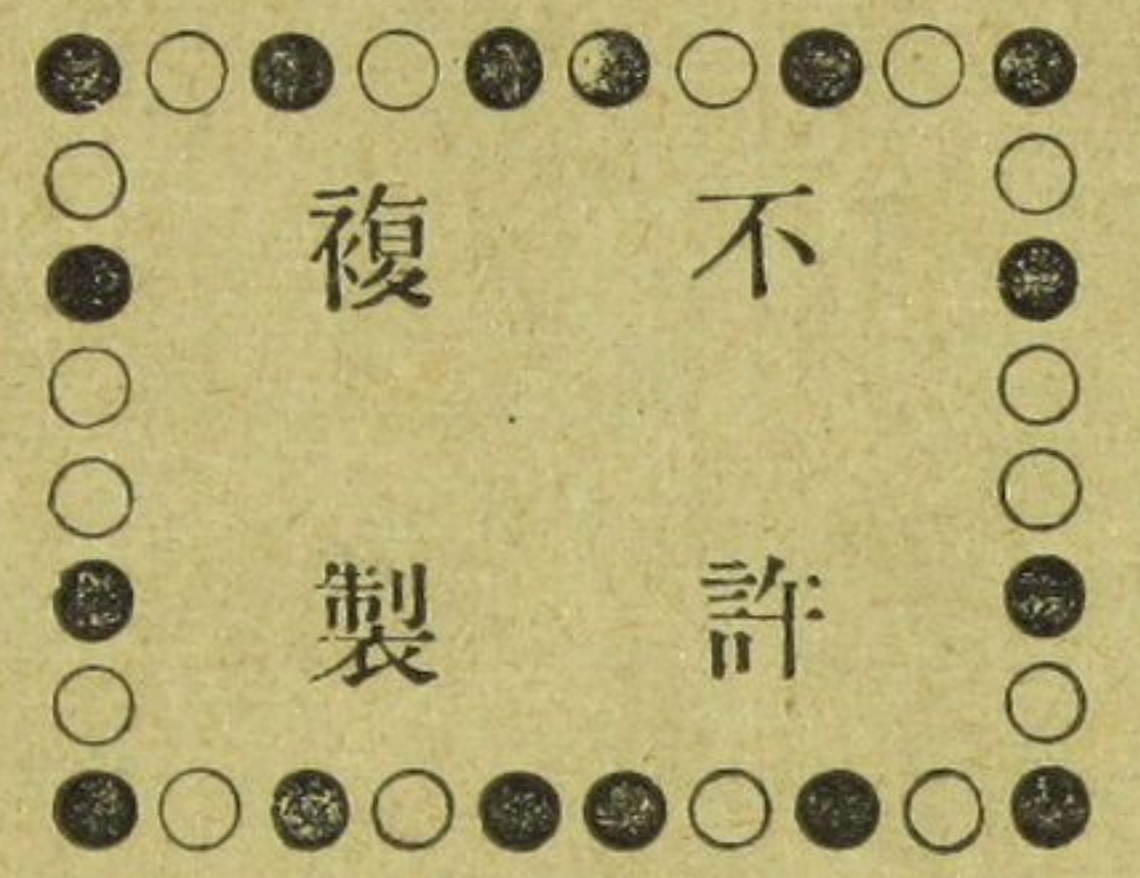
明治三十五年十月廿八日印刷  
 全 三十五年十一月二日發行

(定價金五錢)

編輯者 田中彌三郎  
東京市芝區豊岡町六十一番地寄留

印刷者 川崎清三  
淺草區南元町二十六番地

印刷所 大川屋印刷所



專賣所 川越 福田書房